

# — 東北大学 SOKAP-Connect「パンデミックの社会課題解決に向けた学際研究」(TUPReP)

東北大学 (押谷 仁)

「パンデミックの社会課題解決に向けた学際研究」(TUPReP)は、総合的な知識を行動に結び付けて持続可能な社会の実現を目指す東北大学の独自プロジェクト(SOKAP-Connect)の一つである。TUPRePでは、日本のCOVID-19死亡率が欧米諸国に比べて低かった理由を、自然科学、人文科学、社会科学の研究者が協力して学際的に調査する。具体的には、(1)各国の感染症の歴史の比較、(2)疾病観や死生観を含む文化的背景、(3)社会的格差の要因などを検討する。そのうえで、次のパンデミックに備えるために、(4)グローバルヘルスガバナンスの改善に向けた、日本独自の貢献を踏まえた国際的な提言を行う予定である。

## 総合知により目指すビジョン / 解決する社会課題

日本のCOVID-19の低死亡率に貢献した歴史・文化・社会的要因を明らかにして国際的に発信し、次のパンデミックに備えるグローバルな体制の改善に貢献する。

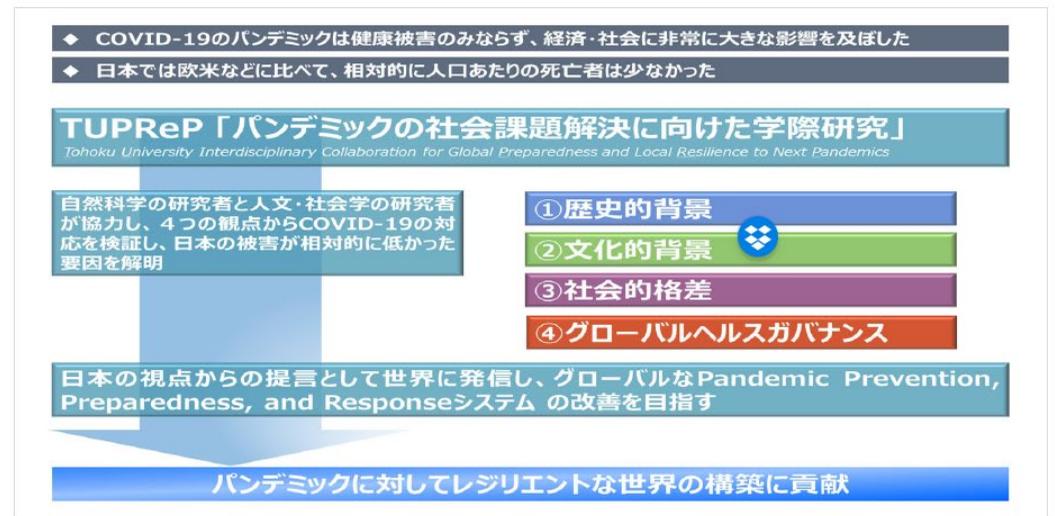
## 参画しているステークホルダー / 「矩」を超えた場づくりの工夫

COVID-19パンデミックにおいて、日本は、重症化リスクの高い高齢者の割合が高く、ワクチンや薬剤の開発への貢献も十分ではなかったにもかかわらず、死亡率が欧米諸国より低かった。医療や公衆衛生にとどまらない、日本独自の歴史・文化・社会的要因が、死亡率の低さに関連したことが推測される

## 生み出された総合知 / 得られた新たな価値

これまでのパンデミック対策を主導してきた欧米諸国の方法では不十分であり、日本独自の歴史・文化・社会的要因を国際的に反映させることで、次のパンデミック対策を改善することが可能となる。

## プロジェクト概要



## 研究体制



## 背景

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の出現から4年近くが経過するが、その流行はいまだ継続している。これまで世界保健機関（WHO）に報告されたCOVID-19による死亡者数は700万人近くになるが、実際の死亡者数はその3倍以上になるとする推計値もある。

人類はその歴史の中で数多くの感染症の脅威にさらされてきた。人類の歴史は感染症との共存の歴史と言っても過言ではない。しかし、近代においては感染症の被害の程度には、大きな地域的偏在が認められ、21世紀に入り相次いで発生している新興感染症の流行も主に低・中開発国といわれるアジアやアフリカで起きてきた。

しかしCOVID-19のパンデミックはまったく異なるパターンをとっている。これまで感染症を克服したと考えられていた欧米先進国において非常に多くの被害が起きているのである。COVID-19による死亡者数は国によって集計の仕方が異なり、単純には比較できないが、2023年5月初旬の時点で、日本のCOVID-19の死亡者が約7.5万人だったのに対し、アメリカでは110万人以上、英国でも22万人以上の死亡が報告されている。人口あたりの死亡者数ではアメリカ・英国の死亡者数は日本のほぼ5.5倍になることになる。単純に計算すると、アメリカ・英国程度の人口あたりの死亡者数が日本で発生したと仮定した場合、40万人以上が死亡していたことになる。シンガポール・韓国などのアジア諸国やニュージーランドなども欧米先進国と比べると人口あたりの死亡者数は少なかった。

このような**欧米先進国とアジアなどとのCOVID-19の被害の違い**についてはさまざまな議論がなされてきているが、**その違いが何に起因するのかは正確にはわかっていない**。おそらく、その背景には単に医療アクセスの問題や近年の新興感染症の流行の経験というようなことだけでなく、**文化的背景や長い感染症との共生の歴史の中で培われてきた疾病観・死生観などの違いも関連していた可能性**がある。現在、COVID-19後の**グローバルなパンデミック対策の枠組みが議論**されている。しかし、**COVID-19で大きな被害を受けた欧米先進国が、COVID-19への対応を十分に総括することなく、そのような議論を主導していることは問題**であると考えられる。

## 目的

このプロジェクトでは、①**歴史的背景**、②**感染症の文化的背景（疾病観・死生観を含む）**、③**社会的格差**、④**グローバルヘルスガバナンス**などの問題について**自然科学の研究者と人文・社会学の研究者が協力して、COVID-19から明らかになったさまざまな社会的課題についてさらに議論を深め、国際的な提言としてまとめていくことを目的**としている。

## プロジェクト概要

- ◆ COVID-19のパンデミックは健康被害のみならず、経済・社会に非常に大きな影響を及ぼした
- ◆ 日本では欧米などに比べて、相対的に人口あたりの死亡者は少なかった

### TUPReP「パンデミックの社会課題解決に向けた学際研究」

Tohoku University Interdisciplinary Collaboration for Global Preparedness and Local Resilience to Next Pandemics

自然科学の研究者と人文・社会学の研究者が協力し、4つの観点からCOVID-19の対応を検証し、日本の被害が相対的に低かった要因を解明

#### ① 歴史的背景

#### ② 文化的背景

#### ③ 社会的格差

#### ④ グローバルヘルスガバナンス

日本の視点からの提言として世界に発信し、グローバルなPandemic Prevention, Preparedness, and Responseシステムの改善を目指す

パンデミックに対してレジリエントな世界の構築に貢献

## 研究体制

### プロジェクト代表



医学系研究科  
教授 押谷 仁

コーディネータ



医学系研究科  
客員教授 坪野吉孝

### ① 歴史的背景

歴史的観点から日本と欧米の感染症に対する考え方について違いを整理し、そのような歴史的視点を提言に反映させる。

### ② 文化的背景

日本の死生観・疾病観などの文化的背景がCOVID-19の対応にどのような影響を与えたかを解析し、その中からグローバルに活用できる要素を抽出し、提言に反映させる。

### ③ 社会的格差

COVID-19で明らかになった社会的格差がパンデミックの被害に及ぼした影響を解析し、社会的弱者をどう守るのかという視点から提言をまとめる。

### ④ グローバルヘルスガバナンス

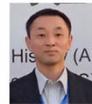
グローバルヘルスガバナンスの課題を日本の視点から整理し、欧米主導で行われているパンデミック対策の枠組みの問題点を明らかにすることで、将来のパンデミックに対するグローバルなシステムに関する提言をまとめる。



経済学研究科  
教授 小田中直樹



災害科学国際研究所  
准教授 川内淳史



東北アジア研究センター  
助教 竹原万雄



文学研究科  
教授 佐藤弘夫



文学研究科  
教授 木村敏明



医学系研究科  
非常勤講師 神代和明



環境科学研究科  
教授 中谷友樹



歯学研究科  
教授 小坂 健



医学系研究科  
助教 齋藤 (小畑) 麻理子



東北アジア研究センター  
助教 膳 媛



東北大学 理事・  
副学長 植木俊哉